

## 2007年度運動方針

<第四回総会にて採択>

撫順の奇蹟を受け継ぐ会は2002年に結成され、以来4年にわたって、会員の創意と熱意を結集して、中国帰還者連絡会の事業と精神を受け継ぐための活動を続けてきました。

この2007年は、中帰連の結成から50周年となる、節目の年です。

反戦平和・日中友好を掲げ、半世紀にわたって活動してきた中帰連の歩みは、過去の過ちと誠実に向かい合い、被害者への謝罪を通じて真の和解へ到達しようと願うすべての人々に励ましを与えています。

一方、歴史修正主義への強い傾向を持つ安倍内閣の誕生に典型的に見られるように、戦争被害者の痛みを認識できず、被害者からの訴えにむしろ居直り、近隣諸国への憎悪をあおる動きも強まっています。こうした動きに平行して、憲法九条改悪など、憲法の平和主義を骨抜きにする改悪がもくろまれています。こうした日本の動きは、アメリカ下院の「慰安婦」決議案などに見られるように、諸国民に疑念と不信を生じさせ、厳しい批判が起きています。

こうしたなか、歴史の偽造を許さず、被害者の痛みと共に苦しむ、右翼的な動きに毅然として立ち向かう受け継ぐ会の役割はますます重要性を増しています。

中国帰還者連絡会の人々を初めとする戦争体験者が高齢化し、ご存命の方が少なくなっていくことは、必然的なことであり、避けることはできません。私たちは、こうした状況に応じた取り組みを工夫し、決して戦争の惨禍の記憶を風化させない取り組みを強めていきます。

以上の基本的認識に立ち、歴史の事実を誤りなく後世に伝え、中帰連の人々の反戦平和と日中友好の精神を受け継ぎ、私たちの社会が人間的な感性と良心を取り戻していくために、受け継ぐ会に名を連ねる私たちは、以下の基本的な方針をもって運動していきます。

### 1. 証言集会の開催と聞き取りの活動

中帰連の半世紀にわたる活動は、きわめて大きな財産を残しています。彼らの行なってきた加害証言という記録だけでなく、加害者となってしまったことを心から悔い、贖罪の気持ちを語る彼らの姿そのものが、人間の良心の存在を私たちに伝えてきたのです。

戦争責任・戦後責任を果たそうとする運動に携わる人々の多くが、運動をはじめたきっかけとして中帰連の証言との出会いをあげています。

しかし、中帰連の方々の高齢化とともに、直接、その姿に接することのできる機会を設けることは、ますます困難になってきています。

本会のもっとも基本的な活動の一つである証言集会の開催も、すでに地域によっては開催が困難になっています。

一方で、昨年は、各支部の地道な努力によって、新たに戦争体験の証言を開始する方も出ました。

こうした努力を引き続き行なっていくとともに、証言集会の開催できる条件を持つ地域では、

「今年度が最後かもしれない」という覚悟をもって、証言集会を開催します。

また、各支部が最低でも一回の証言集会を開催することに取り組みます。

証言集会の開催にあたっては、その内容や宣伝に工夫をこらし、できるだけ多くの方々に参加してもらえるように努力し、受け継ぐ会への入会や季刊『中帰連』の販売・購読を呼びかけます。

その体験と記憶を後世に伝えていくためのもっとも基本的な作業である聞き取り活動については、もはや一刻の猶予もありません。各支部がそれぞれの地域で聞き取り活動を本格的に行ない、その成果を何らかの形でまとめるように努力します。

聞き取りの成果は季刊『中帰連』などの出版物やWEBサイトなどで積極的に公開していきます。

## 2. 中帰連平和記念館の充実と活用

特別会員の方々から寄せられた多大な浄財をもとに建設された中帰連平和記念館に、受け継ぐ会の新しい本部を確立します。できるかぎり常駐的な態勢を整えるなど、受け継ぐ会の本部としての機能を果たせるように整備を進めていきます。

平和記念館には三つの意義があります。

第一に、中帰連の活動の記録と、中帰連の人々の記憶を集積していく拠点としての意義です。

第二に、戦争の加害の記録を集積していく専門図書館としての意義があります。

第三に、中帰連の「侵略への反省に基づく反戦平和・日中友好」の精神を受け継ぐ人々の活動の拠点としていく意義があります。

今後、図書の整理や蔵書の充実などの面、また、資金的な面でも記念館の運用に責任をもって取り組んでいくとともに、絵画や資料の展示など、記念館を活用した企画を実行していきます。また、こうした取り組みが進むほど、右翼などによる妨害も激しさを増していくことが予想されますが、そうした面にも注意を払いながら、記念館の円滑な運用と活用に取り組んでいきます。

## 3. 中帰連に関する研究の推進

中帰連の人々の経てきた歴史的事実があらためて注目を浴びつつあります。

これまで、中帰連について注目されてきたのは、その加害体験の内容でした。「三光」作戦や毒ガス戦、性暴力や捕虜刺突訓練・生体解剖などをはじめ、戦場の狂気を伝える証言が、日中戦争の実態を解明しようとする観点から参考にされてきたのです。

以上の観点とともに、近年、新たな動きとして、中帰連の「認罪精神」や、中国の被害者の人々との和解、戦後の証言活動などの意味を問い直そうとする研究も進められつつあります。中国の戦犯教育政策と中帰連精神の意味を深く追究する研究活動を、本会として支援していきます。

同時に、そうした研究の土台となる歴史的事実の集積に取り組みます。

この点で重要な課題は、太原戦犯管理所に関する歴史的事実の発掘と分析です。

太原戦犯管理所は、収容された人数が少なかったことや、撫順戦犯管理所のような展示施設が中国にも残されていないことなどから、撫順に比べて、その歴史体験の蓄積が弱い面が否めません。体験者の聞き取りを積極的に進め、中国側のものも含めて資料を集めていくことに努力します。

## 4. 歴史の偽造を許さない取り組みの強化

歴史の改ざんと歪曲を目論む動きが依然として活発に行なわれています。

戦争の加害を伝えてきた中帰連と受け継ぐ会は、右翼勢力の攻撃対象となっています。これは、「敵に反対されることは良いことだ」との言葉もあるように、私たちの活動が彼らの目論見

に大きな打撃を与えていることを表しています。

今年も私たちは過去の歴史の偽造を目論み、隣人との友好を壊そうとするすべての動きに断固として抗議します。季刊『中帰連』などで理論的に反論を加えていくとともに、公共の場で公人から発せられた妄言には抗議活動を諸団体と協力しながら行ないます。

特に今年は、右翼勢力が攻撃を集中している「慰安婦」問題と南京事件の問題について、諸団体と協力しながら、歴史の事実を伝えていく活動に取り組みます。

教育基本法の改悪が強行されるなか、誤った歴史認識を教育現場に持ち込もうとする動きが顕著になってきています。本会内外の教育関係者とも力を合わせ、「戦争のできる国づくり」を食い止めるために努力します。

## 5. 日中友好への新たな動きをつくる

撫順戦犯管理所・撫順市政府・撫順市社会科学院・平頂山記念館など、交流の深い撫順の諸機関、中国国際友誼促進会や中国監獄学会などの中央機関と日常的に意見交換や機関紙等の送付を行ないます。

また、中国の若い世代との交流も進めていきます。

昨年の8・20集会を共催で成功させた諸団体とともに、撫順市訪問を主目的とした訪中団を、今年の秋、派遣いたします。

## 6. より大きな運動を作っていくために

すべての活動の基礎は会員にあります。より多くの方々に本会の会員となって運動に参加してもらうことに取り組みます。そのために、本会を紹介するパンフレットを作成するほか、WEBサイトの受け継ぐ会のページを充実させるなど、本会を宣伝することに力を尽くします。

会報「前へ前へ」をより充実したものにし、全会員へ届けます。

すべての活動と季刊『中帰連』の拡販とを結びつけ、部数の拡大をめざします。

組織の運営にあたっては、情報の共有などを通じて民主的な運営をこころがけます。同時に、特定の個人に過大な負担を強いない組織作りに取り組みます。

若い世代に中帰連の精神を伝えていくために、読書会の定期開催などに取り組みます。

受け継ぐ会は、より大きな運動をより多くの人々とともに担っていくために、幅広い個人・団体と手を結ぶ不偏不党の立場を貫き、多くの目的を共にする友好団体の活動に積極的に協力していきます。

以 上